

水野教育長記者会見概要

日時：令和6年8月26日（月）16時30分～17時10分

場所：大阪府庁別館6階 委員会議室

【水野教育長より】

教育委員会の取り組みについて

①電話相談「すこやかダイヤル」推進週間（第2期）について

府教育センターでは、年間を通して、児童生徒、保護者、教職員を対象に電話や電子メール、ファックス、LINEで学校等での悩みについての相談に応じ、解決に向けた支援を行っているところです。

夏休み明けとなります9月2日から9月6日まで、通常よりも電話回線を増やして相談体制の強化をしております。開設時間は、9時30分から17時30分までです。なお、電子メール、ファックスは24時間受付で、回答は後日となっております。

相談には、心理士等の専門相談員が対応いたします。また必要に応じて医療、福祉等の関係機関とも連携し、解決を図っていきます。

この推進週間につきましては、政令市を除く府内小中学校、高等学校、支援学校にポスターを配付し、周知をしております。また、相談窓口の連絡先を示したカードを子どもたち1人1人に配付しております。

子どもたちには、電話相談「すこやかダイヤル」に加えて、LINEを活用した教育相談を通常の日曜日から木曜日の週5日に加えて、9月12日までの毎日、19時から22時まで実施しております。

夏休みが終わり、授業が再開されるこの時期の子どもたちは、学校生活への不安を抱きやすくなる時期でもあります。大阪府教育庁では、教育相談を強化いたしますが、子どもたちの様子で気になることがあれば、身近な大人が、ぜひ声をかけてあげてほしいと思っております。

子どもだけではなく、保護者の方も、いじめ、不登校、子ども同士のトラブル等での学校での出来事や、家での出来事など、子どものことでお悩みや不安を感じたときは、1人で抱え込まずにぜひともご相談をお願いします。

②公立小中学校に在籍する日本語指導が必要な児童生徒等に対する府の施策について

先日、文部科学省が公表した「令和5年度日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」結果について、大阪府では、政令市を含め、公立小中学校や府立高校等に在籍する日本語指導が必要な児童生徒数は5,040人で、前回の令和3年度調査と比較しますと、23.1%の増加となっております。

うち、小中学校、義務教育学校の当該児童生徒数は 4,535 名です。大阪府においても、当該児童生徒に対し、自身のアイデンティティを大切に育むとともに、社会参画を果たしていくうえで必要な力を育むことが重要であると考え、様々な施策を進めているところです。

主な 3 つの事業をご紹介します。

まず 1 つは、オンラインによる日本語指導です。

日本語の理解を深めるため、小中学校においては、在籍する当該児童生徒に対し、日本語指導を実施しておりますが、専門の指導員の配置というのは少なく、校内体制だけでは十分な日本語指導を行うことが難しい学校もあることから、令和 4 年度から独自に日本語指導員を雇用し、オンラインによる日本語指導を実施しております。

2 つめは、オンラインによる国際クラブの活動についてです。

外国人児童生徒および外国に繋がりのある児童生徒の存在は、異なる文化の理解の絶好の機会とも言えます。

そこでオンラインでの会議機能を使い、参加する児童生徒が互いの文化に親しむ活動や多文化共生教育に関わる講師による多文化の紹介、参加する児童生徒が感想を交流する活動等を行うオンラインによる国際クラブを実施しております。

こちらは年間 6 回実施予定で、現在 2 回終了したところです。

3 つめは、実際の出会いの場、「OSAKA 多文化共生フォーラム」についてです。府内の日本語指導が必要な中学生や、外国にルーツのある中学生が他校の中学生と出会ったり、高校生から高校生活に関する話等を聞いたりすることができます。

それによって、アイデンティティを育み、進路に展望を持つことを目的として実施しております。今年度は、7 月 13 日に大阪府教育センターで実施し、98 人の中学生をはじめ、その保護者、また、府立高校に通う外国ルーツの高校生などを含めて 300 人以上が集まりました。

高校の多文化クラブの発表では、高校生の先輩が自身のルーツに誇りと自信を持って演舞する姿に、会場から大きな拍手が贈られました。

高校生スピーチでは、中学生の時に日本に来て、日本語がわからず苦労しながらもがんばって高校に合格したことや、今は自分の国と日本の役に立つ仕事がしたいと思っていることなど、自身の経験や今後の夢を語ってくれました。

個別の進路相談では、外国にルーツのある生徒等が多く通う府立高校や府の入試担当者が、個別にブースを作り、中学生や保護者の相談に応じました。

府教育庁としましては、今後も児童生徒 1 人 1 人が自身のアイデンティティを大切に育み、将来に向かって前向きに学校生活を過ごすことができるように支援をしてまいります。

③「府立学校の学校経営に係る臨時研修会」について

今年 4 月に私が教育長に就任して以来、府立学校のブランディングをしっかりと進めていきたいと思いますというお話をしております。

そのブランディングに資するプロモーションが必要であることも様々な場で発信をして、その取り組みを進めてまいりました。

その一環として、8月1日の木曜日に、府立学校の校長を対象に、学校経営に係る臨時研修会を開催いたしました。

当日は、約80名の校長が出席をし、私の話として、民間企業の経営者としての経験を踏まえて、学校経営者に求めているものであったりとか、魅力をどのように発見して、それを磨いてプロモーションしていくかというところの話をしました。

もちろんそれが、「あなたの高校でぜひやってくれ」という話ではなく、考え方のヒントになればというところでお話をしたつもりです。

そして、私の話以外にも、講師として私立福岡女子商業高校の柴山校長先生もお招きしました。これまで実践してこられたプロモーションについて、キャッチーな言葉もたくさんあり、私個人としても示唆に富んだ内容だったと思いますし、参加された校長先生からもそのようなお声をいただいております。

柴山先生は、30歳で校長に就任をいたしまして、「挑戦を楽しめ」というスローガンのもと、生徒主体による新しい制服のデザインや修学旅行のプランニングなど、様々な改革を進め、進路実績の向上にとどまることなく、受験者数を大幅に伸ばすなど、まさに今注目されている学校の一つかなと思います。

この講義の後には、各学校の魅力やその効果的な発信方法について、校長先生方に各グループにわかれていただき、ご議論をいただきました。

私もその様子を見ていましたが、「なかなか自校の魅力は、自分ではなかなか見つけにくいな」というお声があり、他のグループの方から、「いや、〇〇高校さんやったら、こういう強みがあるじゃないですか」って言われて、「確かに」という声があったりしました。

プロモーションの手法のところでは、校長先生のご経歴や、場合によっては年齢のところで結構発想に差があるところも面白かったなと感じました。

その研修後のアンケートも実施しましたが、満足度が実に98%を超えておりまして、「経営的視点をもっと磨きたい」であるとか、「講演で聞いたことを学校経営にも生かしたい」などといった肯定的な声が多数寄せられております。

引き続き、府立高校の魅力発信に関しましては、府教育庁としても、しっかりバックアップをしてまいりたいと考えております。

④「学校訪問」について

学校訪問に関しては、夏休みの時期ということもあり、7月29日に城東工科高校、そして本日、8月26日吹田東高校に行つてまいりました。私からは以上です。

【質疑応答】

○「OSAKA 多文化共生フォーラム」について

(朝日新聞)

日本語指導が必要な生徒のサポートについて質問させていただきます。「OSAKA 多文化共生フォーラム」で、当日個別ブースでの「進路相談」ともありましたが、具体的にどんな悩み、どんな相談があったのか、それが学力に関する相談なのか、あるいは進路をそもそもどういうふうを選んだらいいのかなど、具体的な相談内容を教えていただけたら幸いです。

(水野教育長)

まさにブースでは、そのようなお話ではあったんですが、担当課から細かいところについて、もし何かあれば情報提供をお願いします。

(市町村教育室小中学校課 進路支援グループ)

当日のブースの中では、高校生も立って来ていましたので、高校生から見たそれぞれの府立高校の楽しいところ、いろんな活動なども直接教えてくれるので、中学生からも、実際の高校生活についての質問もたくさんしてくれていました。

一方でご指摘ありましたように、「どういった勉強をしたらいいのか」、「どういった辞書を使っているんですか」、「高校に行ったら、どういったところで日本語指導を受けられるんですか」など、そういう学習面での質問も多々ありました。

(水野教育長)

やはり、少数散在化してるところがあり、それぞれのルーツのある国が同じ子たちの交流があればいいのですが、地域によってはなかなかそういうものもございませんので、単に日本語を習得したらいいのではなく、やはりその同じルーツの子たちで仲間作りというものをしっかりしていき、そこで支え合って、やっぱり年も近いと当然苦労も似たようなところを共有できますので、まさにそういう機会にもなっていたんじゃないかなと思っております。

○高校再編整備について教育長としての考え

(MBS)

先ほどの教育委員会会議についてお伺いします。府立高校の再編計画が示された中で、今回、大正白稜高校と福泉高校が、募集停止の方針という決定が出たところですが、この2校が募集停止に至った背景をまずお伺いしたいです。

また、府の教育庁というのは、こういう府立高校の再編も進めつつ、一方で私学の無償化であったり、はたまた公立高校の入試の日程を早めたりするなどといった形で、高校の計画

をうまくバランスよくとっていかないといけないところはあるかと思いますが、今後、その高校教育の分野で公立と私立のバランスを、どういうふうにとっていくのか、水野教育長のお考えを聞かせてください。

(水野教育長)

つい先ほど開催されました教育委員会会議におきまして、大正白稜高校の件と、福泉高校の件で、ご承認をいただいたところです。これから議会のプロセスの方に進んでまいります。

再編整備に関しましては、3年で志願者数が連続割れたところを、一定俎上にのせていき、そして多角的な視点を持って、どういう形で再編整備をしていくかというもの、このようなステージになっていきます。これはこの場でも前回もご説明しましたが、「3年連続割れたら即統廃合するんだ」というものではなく、その状況をしっかりと見つつ、判断をしていくというものです。

今回に関しましては、先ほどの教育委員会会議でも様々ご意見いただきましたが、その2校に関しては、一つずつ理由が同じではなく、「こちらの学校に関してはこうである。」という形で、地域性、志願者数の実際の数、割れ方というところ、あとは全体のバランスというところも見えていく必要があるかなと思っております。

割れている数で言いますと、現段階で3年連続は19校ありますが、当然「1年で19校同時に閉じる」という議論ではなくて、その状況を見つつ、子どもたちへの受験への影響も考えながら、総合的に判断をしていく、大枠で言うところのお話になります。

○高校教育における公立私立のバランスについて

(MBS)

総合的なところでは、全体のバランスを見ていく必要があるという話の中で、私立の無償化を進めることによって、ある種の私立人気が高まっています。

一方で、今回のような公立が統廃合されるという話になると、やっぱり公立高校って魅力がないんじゃないかとどうしても思われてしまう。とはいえ、公立高校を何とか存続させていく一つの策として、高校入試の日程を早めるなどの策にも着手をしている中で、高校教育を公立私立のバランスをどのように取りながら進めていくのか、教育庁としてのお考えを聞かせていただけますか。

(水野教育長)

おっしゃるように教育庁には私学行政も担い、許認可権もございまして、府立高校だけがとにかく素晴らしくなり、私立の人気はどんどんなくなっていき、みんなが公立高校に来ればいいんだという考えではもちろんございません。

その逆も真なりで、私学の方で無償化がスタートし、令和8年度に制度が完成いたします。専願率が30%を初めて超えました。私学に行きたい子が行けるようになったというこ

とは、やはりそれは素晴らしいことと思うと同時に、府立に行きたい子が減ったのではないということも、当然、セットとしては議論していかないといけません。

私学目線ではやはり2点です。一つは「専願率」。つまり来たい子が、どれぐらい来てくれたのか、どれぐらい手を挙げてくれたのか、これは一つのポイントです。

もう一つは「併願戻り」です。公立高校を受けたけれども、残念ながら結果が出なくて、私立に戻ってくる、こういう生徒も私学にとっては大切な生徒だと思います。それらを私学としては見ていく。

しかし、私は私学だけを見ているわけでは当然ございませんので、先ほど申し上げた府立学校、府立高校の設置者としての教育庁としての視点と、あとは大阪府全体の教育というところを考えたときに、やはり公立私立が、切磋琢磨をしていき、両翼として、しっかりと子どもたちに選ばれるような高校であることを追求していくことが、私のバランスの取り方かなと感じております。

○府立高校におけるブランディングに係る教育長の考え方

(共同通信)

先ほど、校長先生たちへの研修会の中で、府立高校が魅力をどのように自分たちで見極めてPRし、ブランディングしていくのかという話でしたが、無償化によって私学に行きたい生徒さんは、フラットに比較することに今後なっていくと思います。その中で府立高校がブランディング、自分たちの特色を伸ばしていく必要性について、教育長はどのようにお考えなのか、改めて伺います。

(水野教育長)

やはり府立高校と言っても、それぞれの高校によって違いがあります。同じように、つい我々は公立・私立と視点を二つに分けがちですが、私立でも学力面、施設面、立地面、そして建学の精神は、それぞれ違うと思います。

同じように府立も、学力面はずいぶんと昔から、それぞれのステージがございましたけれども、やっぱりスクールポリシー、スクールミッションにも違いが出てきております。それぞれの高校が大切にしているところも違いますし、もちろんハード面も違います。

ですので、それらをよりわかりやすく示し、「この高校は、こういうミッションを帯びているところなんだ」という点を明確にすれば、「どういう生徒に入ってきてほしいのか」、「高校の3年間でどういう生徒に育てていこうとしているのか」、「育てていくためにはどのようなカリキュラムを、この高校は用意しているのか」、このようなものをしっかり策定していくことが求められます。

それを策定しても、知っていただかないと、これはあまり意味がないと思います。となると、ブランディングをしようとしたとしても、プロモーションがどうしても必要になってきます。

つまり、誰に知っていただくかということ、大枠で言えばもちろん大阪府民になりますが、ターゲットで言いますと、やはり中学生及びその保護者です。中学生や、その保護者にどのように各高校のスクールミッションや取り組み、カリキュラムポリシー、グラデーションポリシーなどを知っていただくのかといったときに、やはり私が大切だと感じることは、SNSの手法論ですが、SNSの活用であったり、「中学生に刺さるものは高校生の方がいいプロモーション媒体をつくれるんじゃないか」であったり、はたまた、「教員自身がいろんなところで、うちの学校はこうなんですよ」と校区内の中学校などでいろんな話をしたりすることで広まっていくこともあろうかと思えます。

私の研修は30分の時間でしたので、そのあたりの手法論に入る少し手前のところ、「これからの学校経営者は、いわゆるそのような営業も含めたプロモーション、つまりトップ営業ですよ。そういうところも必要なのではないか。」という投げかけをさせていただいたところです。

○府立高校の魅力発信に対する教育長の助言

(共同通信)

今の時点でも特色は既に府立高校にはそれぞれあり、ただそれが知られていないという現状の認識でいらっしゃるのか、あるいは特色自体についても、特に普通科高校はなかなか違いを出しにくい部分もあると思うのですが、特色自体をこれから磨いていかなきゃいけないのか、今どういう現状にあるというご認識でしょうか。

(水野教育長)

まさにその点は、府立高校全体でこうだというのは難しいです。「この高校は、魅力や特色があるのにプロモーションが弱いな」と感じる高校もあれば、逆に「もうブランド化が明確にできていて、プロモーションをせずとも、そもそもたくさんお越しいただいてるのであれば、そのような高校に私が言うようなことを一律、当てはめる必要はないんじゃないか」というものもあります。

あとは、普通科ゆえの特色が見いだしにくいところもお話としては聞いていますので、その点に関しても、「オズボーンのチェックリスト」などを使って、新たな魅力を元々あるものから、何かを組み合わせで作るということも、考えとしてはいいんじゃないかなどというお話をしました。

ですので、公立高校全てが、プロモーションが弱いという議論ではなく、弱いところもあれば、発信をしているけれども、そもそも発信する媒体に訴求力がないものもあるかもしれない。その点を一つ一つ校長先生方に考えていただきたいですし、もちろん府教育委員会としても、その点をバックアップしていくという考えです。

○公立高校に求められる役割について

(共同通信)

最後に、公立・私立という分け方をしたときに、よく言われるのは授業料が無償化だとしても、その他の教育費、施設使用料などいろんな支出があります。その教育費全体を見れば、公立の方が比較的安く済むという意味で、やはりセーフティネットとしての役割が求められると常々言われていると思いますが、その点について教育長の考え、改めて教えてください。

(水野教育長)

府立高校自体はセーフティネットの役割を求められていると思っています。そのようなところも一つの特色だと思いますし、担うべき役割だというある種の使命感を持って、府立高校のいろいろなあり方という点では、議論させていただいているところです。

○教育長による学校訪問の目的について

(日経新聞)

府立高校のブランディング、プロモーションが、水野教育長の重点的なテーマの一つだと認識していますが、教育長は就任以来、府立高校の学校訪問を定期的に行っていらっしゃいます目的を、改めて教えていただきたいです。

また、学校訪問に行かれて、教育長がどのような感想やお考えを持たれたのかということ、これから発信する機会などはあるのでしょうか。

(水野教育長)

まず、私が府立高校を訪問する目的は、私自身が府立高校を知る必要があるからです。やはりこの教育長の立場というものは、教育委員会の中で上がってこられたり、学校現場の校長先生がなられたりすることが多いかなと思います。

そのようなみなさんであれば、学校を見てこられています。私はそういうわけではないので、政策決定・意思決定をするときに少しでも現場の声を聞いておきたい、見ておきたいということ、これがまず第1の理由です。

学校に訪問しますと、当然、校長先生や、何かのご担当の先生方との対話が生まれてきます。そこで、例えば「私はこういうプロモーションが大事だと思っています。」「この学校ならば、ホームページにはいいことを書いているけど、多分見せ方としては弱いと思います。」などという話をさせてもらい、お互いに気づきを得ることもあります。

また、「実はこういうこともやっているんです。」という話になれば、「それこそインスタで発信したらいいんじゃないですかね。」などという対話をする機会になっています。これは、結果論的には2つめのポイントだと思います。

それらを改めて発信する機会があるのかという点については、まず一つに、私自身のXか

ら発信をさせていただいております。大体、私が「〇〇高校を訪問しました。」と投稿すると、500 ビューぐらいなんです。弱いんですね。そもそも私のアカウントが、弱いんですけども、私もずっとXを活用してきたわけではなくて、この4月からそういった運用の仕方をやってみているのですが、発信の仕方や使う画像によって明らかにビュー数が増えるときがあります。これは大変勉強になりました。いわゆる「バズる」ということも一度、経験させていただきました。

そういうことをフィードバックとして、この前の校長会でも、私が35校を訪問した感想や、ブランディング、プロモーションに関することは、フィードバックさせていただいております。

〇定員割れする高校の原因分析について

(共同通信)

この数ヶ月、府立学校の定員割れがずっと議論されてきました。当然、少子化は一つ大きな原因だとは承知していますが、学校訪問をされてみて、定員割れしている学校と、そうでない学校の違いのようなものは、何か共通して言えることはあるのでしょうか。

それは、これまで水野教育長がおっしゃっていたようなブランディングであったり、プロモーションの足りなさというところになってくるのでしょうか。

(水野教育長)

やはり前提で言うと、まず中学3年生の数が減っていることは大きな定員割れの要素であり、人数が少なくなった中、公私比率という点で、以前は7:3で、6:4になってくるという公私比率の話でした。結果論でしかないんですが、結果的には6対4ぐらいになるのか、少ない人数という中でさらに6:4になっていき、そして、通信制に進むという、つまり多様な進路ニーズを、子どもたちが以前よりも持っています。これが分析の基礎になってくると思います。

その結果として、今回は約70校の定員割れがあったということを捉えたときに、先ほどの大枠の三つの要因だけでは語れないところは、どこなのだろうかと分析すると、プロモーションは、いわゆる「努力しろ」としては大いにあるんではないかと思えます。

つまり、その原因分析で、そもそも減ってきている子どもの数を増やすというような理屈だと、教育政策としては、なかなか手の打ちようがないところがございます。

今、我々ができる「努力しろ」が高いものが、プロモーションの部分であったり、ブランディングの部分であったりするという認識です。

ですので、「これが不足しているから」という話ではなく、総合的な様々な要素から見ていく必要があるという認識です。

○学校教育審議会からの答申を受けて（入試日程の変更のスケジュール）

（産経新聞）

先日、学校教育審議会からの答申の手交式がありました。こちらの内容の中で、一般選抜について数週間早めることが望ましいというお言葉があり、今後検討していくということでしたけども、この検討の決定までのざっくりとしたスケジュール感を教えてもらえますか。

（水野教育長）

ざっくりでいいますと、まさに手交式をしたところですので、答申を受けて、もちろん教育委員会会議等で、本当に政策として図っていくとなれば、それなりのプロセスがありますし、何より、入試の日程を変えるということは、多方面に影響があることですので、少なくとも1年半前には告知・周知をしっかりとしなければならないと考えていますし、そのため最短で令和8年という言い方になりました。

メディアの皆さんもそういう形で結構論じていただいたんですが、あくまで最短ですので、「やはりこの課題に対してはもう少し周知しないとイケない。」とか、「これは検討を要する。」ということが、これから出てくるので、令和8年より後ろになるということはありません。言えるのは、少なくとも令和8年より前になることはない、この場で言い切れるかなど。

ですので、ざっくりしたスケジュール感についても、この場で逆にそれを話すことで、今後の展開が難しくなることもございます。ただ、1年半という時間で周知をするということは、当然その間に様々な議論をする予定であるという見解です。

○進学フェアを終えて

（朝日新聞）

8月に公立の「進学フェア」がありました。プロモーションという点で、進学フェアをもし、見られまして、どこか改善の余地があるのかなど、どういうふう感じられたのか、お聞かせいただいてもいいでしょうか。

（水野教育長）

進学フェアは今回2日間の平日開催で、エディオン大阪で開催させていただきましたが、私はその日に公務が入ってしまったので、直接は行けておりません。

担当課からの報告では、満員御礼で、多くの子どもたち、保護者に来ていただいて、各学校の魅力をしっかり発信できたと聞いております。

ただそれが、100点満点かという点、もちろん、もっとやりようはあったんじゃないかという点を投げかけておりますので、来年はまた開催場所が元に戻りますが、より子どもたちがそれぞれの高校の魅力を感じられるようなしつらえは、しっかり議論していく必要があ

り、完成形ではないという認識ではおります。

○再編整備の実施対象2校について

(朝日新聞)

再編整備案ですが、今回、大正白稜高校が募集停止の対象になっていました。その高校はそもそも2018年に統合を経て開校したばかりの学校でしたが、わずか6年で閉校されます。元々、6年前、この先中学生の数が減っていくと見えている中で、結果として、わずか6年で閉校してしまうという状況に関して、設置者としての責任をどのように感じているのか、教えていただけますか。

(水野教育長)

やはり、当時で言うと、元々あった2校の定員が割れていた。その2校を同時に大正区内で二つを閉じるというのは、それこそ大きな影響があるという認識で、割れている二つを大正区内で一つの高校、大正白稜高校にしたという経緯を聞いております。

もちろんそのときには、「この大正白稜高校が地域の皆さんに愛されて、しっかりと定員を満たしていくであろう」という期待も込めて、様々な新たな学科コースの設置をしていったと聞いております。

しかしながら、そのときに、描いた理想の形には結果的にはならず、こういう形になったというのは、私としては大変残念に感じております。やはり、議論した通りに進んでいかなかったということに対しては、残念だなと思っております。

ただこれは、その地域に選ばれるという要素ももちろんありますが、その大正白稜高校の中で、例えば勉強がものすごく苦手な子たちから、勉強がものすごく得意な子たちを入れるようないわゆる公立中学校のような形ではなく、やはり一定の学力層、一定の受け皿となっている領域に対して、地域の子がそこをめざしてくるわけです。そこに関してのニーズというのが、結果的に満たせてはいなかった。つまり定数を割ってしまったというところかなと思います。